

二 東京外国語学校時代 一八七三—一九四四年

1 建学期

建学期の独語科

複雑な経過を経つつも、一八七三（明治六）年に本学は建学を迎えた。本学の応募資格は十三歳以上十八歳以下の小学校卒業生。修業年限は当初四年であったが、翌年には六年に改定、さらに三年後には五年になるなど一定しない状況だった。クラス編成は、上下二等に分かれ、さらに各等には六か月課程の級が四つ設けられた。建学当時の独語科のクラス毎の生徒数は、合併により引き継いだ生徒に新入生を加え、次の通りであった。

	第一級	第二級	第三級	第四級
上等				一〇人
下等	二〇人	二七人	二一人	一八人

生徒数は計九六名である。ただし、上等第一級第二級第三級には生徒がいなかった。なお、独語科の生徒数は七四年は一七九人、七五年は一六一人、七六年は二七四人となっている。その後、漸減し、毎年一五〇人前後で、一八八一（明治十四）年以降は一〇〇人ほどになる。なお、卒業生は、八〇年の二名が最初である（仏語露語では前年に最初の卒業生が出ている）。その後、八一年にゼロ、八二年に二名、八三年に七名、八四年に六名で、卒業生は合計一

七名にすぎない。

建学当時の東京外国語学校の教育態勢は、ネイティブスピーカーのドイツ人などを主体としたものである。一八七四（明治七）年三月に作成された教員名簿によると、独語学の教諭はドイツ人五名（ウイットコウスキ、トーゼロウスキ、ハンゼン、クライネル、コニツケ。原語の記録はなく、一九〇九「明治四十二」年まで正確なスベルおよび呼称は分からない）を数える。日本人は独逸語学教諭心得の山内光屋、渡邊広吉の二人のみである。これは欧米人による教育に重点を置かざるをえなかった当時の教育状況を示している。しかし、一八七九（明治十二）年になると、ドイツ人二名、スイス人一名に対して、日本人教員が二名、兼嘱教員一名となっており、徐々に日本人主体の教育態勢になっていく。八〇年の教員名簿では、ドイツ人一名、スイス人二名に対して、四名の日本人教師が記載されている。建学一〇年後の八四（明治十七）年の教員名簿では、独語科の陣容は、次のように、ネイティブスピーカー二名を含む、計五名である。

一八八四（明治十七）年

教諭 寺田勇吉

教員 リウドルフ・レイマン（普国）、パウル・マエツト（独国）

助教諭 高木計

御用掛 藤山治一

なお、この時、仏語学の教育陣容は、教諭二名、教員一名（フランス人）、助教諭三名の計六名、露語学の教育陣容は、教諭三名、教員一名（アメリカ人）、兼嘱教員一名の計五名である。一八八五（明治十八）年までに、独語学の教諭、教員などとして記録されている外国人は一二名、日本人は一〇名ほどである。この時期、教育態勢は必ずし

二 東京外国語学校時代

も安定していたとは言えない状況である。

カリキュラムは、現在と比べるときわめて単純なものであるが、おおよその感じをつかむため、一八七三（明治六）年当時の独語科の学科課程表を載せる（下等のみ）。

下等語学第一級	一週三十時	読方	五時	文典	三時	会話	四時	地理	二時	作文	三時	暗誦	二時	算術	五時	書取	三時
歴史	三時																
下等語学第二級	一週三十時	算術	六時	作文	三時	読方	五時	会話	四時	暗誦	三時	書取	四時	地理	二時	文典	三時
下等語学第三級	一週三十時	読方	六時	算術	六時	暗誦	三時	文典	三時	会話	四時	地理	二時	作文	三時	書取	三時
下等語学第四級	一週三十時	算術	六時	暗誦	三時	文法	三時	読方	六時	会話	六時	書取	四時	作文	二時		

カリキュラムは、一週三〇時間の大方が語学に割り当てられる語学中心のものと見えよう。すでに文法をもって外国語を学ぶ態勢ができてきているということ、および専門学校への進学の準備として、地理、歴史というような、語学以外の科目もわずかながら設けられている（この傾向は時代とともにさらに強化される）ことなどが注意を引く。

廃校

一八七三（明治六）年に建学されたこの東京外国語学校は、商業重視の政策により、一八八四（明治十七）年に設立された東京外国語学校所屬高等商業学校と文部省直轄東京商業学校が合併し、八五年九月に、東京商業学校になる

に及び、一二年の短きをもつて廃止される。なお、その少し前に、独語科の生徒は、仏語科の学生と共に、東京大学予備門（後の第一高等学校）に転属させられている。

東京外国語学校の廃止に前後して、すでに述べたように、一八八三（明治十六）年には独逸学協会学校（後の独協大学）が設立され、また、八五年には学習院でもドイツ語教育が始まるとともに、八七年には東京大学文学部（当時文科大学）に独逸文学科が新設されるなど、ドイツ語学・文学の教育が広く行われるようになってきた。また、一八九四（明治二十七年）年の高等学校令の発布により、各地に設置されるようになった旧制高等学校では語学教育が重視され、なかでもドイツ語の人気は高く、盛んに教育が行われた。森鷗外がドイツの文学作品をしきりに翻訳紹介したのは八九年頃からである。哲学の分野でも、ドイツ哲学が主流をなすようになる。

2 創立・独立期の独語学科

一八九六（明治二十九）年、第九帝国議会において衆議院および貴族院の両院が外国語学校の開設を建議し、その結果、翌九七年、高等商業学校に附属外国語学校が付設される形で、正科三年、特別科三年以内の教育体制をもつて、東京外国語学校が再興された。これをもつて本学の創立とするのであるが、その際、英語、仏語、露語、西語、清語、韓語と並んで、独語学科が設置される。正科の生徒数は二二名、特別科の生徒数は四一名であった。

さらに、一八九九（明治三十二年）四月には、高等商業学校から独立し、東京外国語学校と改称されることにより、本学は、文部省直轄の三官立専門学校のひとつとして独立したことになる（他の二つの官立専門学校は東京美術学校と東京音楽学校）。独語学科の生徒数は、正科が三二名、特別科が六二名であった。なお、この年すでに、附属東京外

二 東京外国語学校時代



第1回卒業生（明治33年）記念撮影。（後列右より）安樂直治、中村達雄、田代光雄、弓削哲三、井手岩吉。（前列）久野英一、山口弘一教授、水野繁太郎教授、マッティーゼン教師、山口小太郎教授、弓削久兵衛

国語学校時代の第一回の特別科（二年制）修了生六名を出している。次の年には、第一回の本科（三年制）卒業生七名を出している。このうちの一人が後に、本学の教授として、独語学科の発展に貢献した田代光雄である。

ドイツ語は、このように本学の建学、そして創立、独立のすべての際に、一つの教育科目として重要視されていたことになる。なお、この本学の再興に関しては、一八七四（明治七）年三月の『東京外国語学校官員並生徒一覽』に独逸語学下等第五級の生徒として記録されている大村仁太郎（当時学習院大学教授）が幾多の時間と労苦を費やしたとのことである。

一八九七（明治三十）年、本学の再興（創立）と共にドイツ語部に迎えられたのが山口小太郎である。山口小太郎は、当時、学習院教授であったが、まず、講師を嘱託され、翌年九月に本学の教授になっている。そのとき同時に水野繁太郎も教



山口小太郎



大村仁太郎

授として着任した。山口小太郎は、一八八四（明治十七）年に十八歳で旧東京外国語学校を卒業した本学卒業生で、ドイツ語のバイブルとも呼ばれた三太郎文典、大村仁太郎・山口小太郎・谷口秀太郎共編『独逸文法教科書』（独逸語学雑誌社、一八九四年）の編者の一人として、また、独逸学協会学校の創始者の一人として有名である。水野繁太郎は、東京外国語学校に十五歳から十九歳までの四年間在学し、一八八五年の本学廃校の際に中退したと考えられる。なお、水野繁太郎は、ドイツ語を主要外国語とするイエズス会の大学（上智大学）設立の企画に当初から参画し、一九一四（大正三）年の上智大学創立とともに、同大学の専任教授となつて本学の教授を退いた。山口小太郎と水野繁太郎は車の両輪のように、草創期の本学におけるドイツ語教育の発展に尽したとのことである。当時の授業風景は、「外語は何しろ週三〇時間もやるので忽ち難しいものにかゝる有様で……（中略）……総じて外語の語学的水準は一頭地を抜いて高く……」と記録されている（『外語懐古録』『東京外語会報』第七九号一九四二年十二月）。

3 その後の変遷

明治後期

本学再興五年後、すなわち一九〇二（明治三十五）年の独語学科の教員名簿からは、日本人主体の教育体制がさらに整い出していることが見てとれる。肩書きの名称も大幅に変わり、現在に通じるものになっている。

一九〇二（明治三十五）年

教授

尺秀三郎、山口小太郎、水野繁太郎、武内大造

助教授

田代光雄



武内大造

外国人教師 オット・シエーレル（ドイツ）

講師 植村正介

武内大造（東大卒）は、一九〇〇（明治三十三）年に教授として着任、途中他校などに七年ほど転出したこともあるが、本学に三〇年以上勤務し、一九三二（昭和七）年退官（名誉教授）。なお、退官後も、講師として一九三九（昭和十四）年まで本学の教壇に立った。尺秀三郎（ライプチヒ大卒）は、一九〇一（明治三十四）年に教授として着任、一九〇九年まで八年間教壇に立つ

た。田代光雄は、すでに述べたように、本学の独語学科に一八九七（明治三十）年九月入学、一九〇〇年首席で卒業した第一回卒業生である。翌〇一年に助教として着任、一〇年から教授になる。一九四〇（昭和十五）年三月退官。植村正介は、他校出身者であるが、講師として一九〇一（明治三十四）年から〇六年まで教壇に立った。男爵、無給などの付記が教員名簿に見られる。この他にも、本学出身者の教師、他校出身者の教師などが毎年おおむね一、二名講師として本学の教壇に立っている。本学再興一五年後、すなわち一九一二（明治四十五）年の独語の教員名簿は次のように記載されている。教育体制に大きな相違は認められないが、〇九年からは外国人教師の氏名に原語が併記されるようになった。

一九二二（明治四十五）年

教授 山口小太郎、水野繁太郎、大津康、田代光雄、武内大造

外国人教師 エルウィン・ワルテル Erwin Walther (ドイツ)

講師 小笠原昌斎

大津康は、一九二一（明治四十四）年から教授の職にあり、一九一五（大正四）年に退官。小笠原昌斎（後に稔と改名）は、一九〇四（明治三十七）年の本学卒業生で、独逸学協会学校教師になった後、一二年から本学の講師として教壇に立ち、一九二一（大正十）年に教授になる。一九四二（昭和十七）年の退官まで三〇年以上にわたって教鞭をとり、ワーグナー楽劇の全訳で有名である。

大正期

特記すべきことは、一九一四（大正三）年、外国人教師 Dr. Walther Röhn が着任したことである。ロエンさん、

あるいはレーンさんと呼ばれ、一七年から本学教授になった辻高衡のベルリン大学附属東洋語学校在任時代の教え子でもある。交替の激しい外国人教師のなかにあって、一九五七（昭和三十二）年秋に没するまで、ほぼ四五年間外語で教鞭をとった。一四年の独語科の教師陣は次のような構成になっている。

一九一四（大正三）年

教授

山口小太郎、水野繁太郎、田代光雄

講師

小笠原昌斎、鼓常良

外国人教師

ワルテル・ロエン Wather Röhn (ドイツ)

この後、一九一七（大正六）年に山口小太郎（教授）が急逝、山口小太郎の後任として、同年四月、辻高衡が教授として着任した。辻高衡は、一八九三（明治二十六）年に独逸学協会学校独逸語専修科を卒業した後、一九〇五（明治三十八）年九月ベルリン大学附属東洋語学校教師を嘱託されたりし、滞独一四年の異色の教授である。「本邦独逸語学界の第一人者」であったばかりでなく、「広範な人脈を有し、平素日独両国融和の為め努力斡旋せられたる所多



ワルテル・ロエン

大」と書かれている（『ゲルマニア 故辻教授追悼号』一九二九年十二月）。一九二八（昭和三）年十二月急逝した（享年六十歳）。

一九一九（大正八）年に学科が部に改正され、各部に文科、貿易科、拓殖科が設置される。文科には、文学と法律の二コースがあった。ドイツ語部は文科と貿易科だけで、拓殖科は設置されなかったが、第二外国語として、英語、仏語と共に、独語が設置さ

れた。

明治から大正へと、教授陣も充実するに伴い、日本のドイツ語は東京外国語学校独語部の時代と言えるようになってきた。しかし、四帝大独文科の膨張発展、主としてドイツ語で教授する上智大学の設立、大阪外国語学校の誕生等によって東京外国語学校も唯一的存在を誇るわけにはいなくなってきた。山口、水野が退官した後の一九二二（大正十）年、およびさらに五年後の一九二六（大正十五）年の独語科の教師陣は次のような構成になっている。

一九二二（大正十）年

教授 武内大造、辻高衡、田代光雄、小笠原昌斎

外国教師 ワルテル・ロエン Walther Röhn

非常勤講師 水野繁太郎、小柳篤二

一九二六（大正十五）年

教授 武内大造、辻高衡、田代光雄、小笠原昌斎

外国教師 ワルテル・ロエン Walther Röhn

非常勤講師 水野繁太郎、小柳篤二、レオポルド・ウインクラ、三谷隆正

一九二六（大正十五）年の構成の特徴は、外国人が二名になっていることである。この態勢は、これ以降長らく続く。小柳篤二は、一九〇九（明治四十二）年本学卒で一九二二（大正十一）年から一九三〇（昭和五）年まで母校の講師として活躍した。

昭和前期

一九二七（昭和二）年東京外国語学校の大学昇格は見送られたが、修業年限は一年延長されて、三年制から四年制となる。三〇年に勝静夫、青木重孝が講師に就任。勝静夫は一九一三（大正二）年本学卒で、広島の俘虜収容所の通訳として特異な経験をもち、一九四二（昭和十七）年七月に没するまで講師として勤務。青木重孝は一九二五（大正十四）年本学卒で、一九三〇（昭和五）年に講師、三二年三月、武内教授依願免官と同時に教授に任ぜられ、四六年に逝去。他校出身者の講師として有名なのは、一高教授だった丸山通一で、一九二七（昭和二）年から講師として教壇に立ち、三八年一月在職のまま逝去。

一九三九年の独語科の教員名簿には、次のような名前が載っている。

一九三九（昭和十四）年

教授

田代光雄、小笠原稔、青木重孝、生駒佳年

雇外国人教師

ワルテル・ロエン Walther Röhn

講師

勝静夫

外国人講師

マルティン・ネトケ Martin Netke

ここに新たに名前の確認できる生駒佳年は、一九二三（大正十二）年本学卒（貿易科）で、いくつかの学校で教壇に立った後、一九三九（昭和十四）年に教授に就任。戦時中ゾルゲ事件の通訳も行った。戦後、長らく独語部の主幹あるいは主任教授を務めた後、一九六一（昭和三十六）年に退官。

明治、大正期の本学の独語学科を支えてきた田代、小笠原が一九四〇（昭和十五）年、四一年と続いて退官すると、東京大学独文科出身の植田敏郎、藤田五郎が本学出身の生駒、青木両教授に加わる。植田敏郎は、一九三一（昭和

六)年に東大を卒業、田代教授の後任として四〇年に教授として着任。藤田五郎は、一九三五(昭和十)年に東大を卒業、小笠原教授の後任として四一年に教授として着任。したがって、四一年の新しくなった教師陣は、以下の六名になっている。

一九四一(昭和十六)年

教授 生駒佳年、青木重孝、植田敏郎、藤田五郎

外国人教師 ワルテル・ロエン

外国人講師 マルティン・ネトケ

藤田五郎は、一九七四(昭和四十九)年に退官するまで、各種のドイツ語教育書を作成するなどして、ドイツ語教育界では誰もが知る存在だった。ドイツ人にドイツ人以上にドイツ語に詳しいと言わせしめ、昭和期の本学の独語学科を代表する名物教授になった。一九八三(昭和五十八)年に「ことだまの万華鏡(藤田五郎先生古希記念論文集)」(広池学園出版部)が刊行されている。一九九七(平成九)年一月逝去(享年八十五歳)。最後まで和独辞典の刊行を夢見ていたとのことである。

4 入学者数、卒業者数

再興された高等商業学校附属外国語学校および東京外国語学校(一八九七「明治三十」年から一九四四「昭和十九」年)の場合、一八九七年、独語科の本科に入学した二八名のうち、三年後に卒業した者は七名、同様に九八年入学者一六名に対し三年後の卒業者は五名、九九年入学者一四名に対し三年後の卒業者は九名、以降大正末期まで毎年

二〇から三〇名の入学者のほぼ半数しか卒業しないという傾向が続いている。それぞれの時期をまとめると、次のようになる（選科卒業生は省く）。

(イ) 明治期（一九〇〇「明治三十三」年から一九一二「明治四十五」年卒業）

一八六名

〔注〕卒業時期は〇七年までは七月、十一月など様々、一二年までは三月

(ロ) 大正期（一九一三「大正二」年から一九二六「大正十五」年卒業）

二四六名

〔注〕卒業は三月

(ハ) 昭和前期（一九二七「昭和二」年から一九五一「昭和二十六」年卒業（旧制最後）

五五一名

〔注〕卒業は原則として三月、ただし四一年には三月と十二月の二回、四二年、四三年、四四年は九月

以前の志願者数は定かではないが、戦時中の一九三八（昭和十三年）、ドイツ語部の募集人員三〇名に対し、一九四九名の志願者があった。三九年は一三一一名。四三年、ドイツ語部の募集人員三〇名に対し、四三五名の志願者があった。かなりの数の志願者と言えよう。この時期の入学者は、後に、勤労働員に学徒出陣にと、苦難の道歩む。

なお、一九一一（明治四十四）年に初めて陸海軍選科生一〇名が修了、このうち独語科は四名。陸海軍委託学生のうち独語科（独語部）を修了した人は、以降一九四四（昭和十九）年までに一三〇名を超える。なかでも、一九一八（大正七）年卒の上村幹男は、陸軍大学の教官として欧州戦史を担当し、主としてドイツ軍の作戦を中心に講義した人物として有名である。